

Diffusion and adoption of new strawberry varieties in Japan : a case study of Nyoho and Toyonoka

著者	Hayashi Shushi
内容記述	Thesis (Ph. D. in Science)--University of Tsukuba, (B), no. 1507, 1999.3.25
発行年	1999
その他のタイトル	日本におけるイチゴ新品種の普及過程 : 女峰およびとよのかの事例
URL	http://hdl.handle.net/2241/5492

氏 名 (本 籍)	林 秀 司 (福 岡 県)
学 位 の 種 類	博 士 (理 学)
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,507 号
学位授与年月日	平成11年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	Diffusion and Adoption of New Strawberry Varieties in Japan : A Case Study of Nyoho and Toyonoka (日本におけるイチゴ新品種の普及過程－女峰およびとよのかの事例－)
主 査	筑波大学教授 理学博士 斎 藤 功
副 査	筑波大学教授 理学博士 高 橋 伸 夫
副 査	筑波大学教授 理学博士 田 林 明
副 査	筑波大学教授 理学博士 手 塚 章

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論は、現代の日本の園芸農業地域における農業イノベーションの普及過程の特質を、イチゴの新品種である女峰およびとよのかを事例に解明したものである。

農業イノベーションの普及に関して、海外においては地理学をはじめ、社会学・経済学などの分野で研究の蓄積がみられたが、資料の制約のため日本における蓄積は少ない。本研究は、日本におけるイチゴの新品種の普及の全体像を詳細に把握するために3つの地域スケールで分析を行った。すなわち、国レベル、地域レベル、集落レベルの3つである。

全国レベルでは、全国農業組合連合会の資料に基づき、イチゴの品種別作付割合の推移と都道府県別でみた栽培品種の分布を検討した。その結果、女峰ととよのかは普及する前のイチゴの栽培品種は宝交早生やダナー、はるのかであったが、女峰ととよのかは1984年頃から急速に普及し、1990年頃にはこれらの品種と完全に交替した。女峰は、栃木県を中心として東北地方から東海地方にかけて広い範囲に普及し、とよのかは福岡県を中心にも九州地方に距離減衰の普及したことが明らかになった。

女峰の普及地域として栃木県を、はるのかの普及地域から福岡県を取り上げ、地域レベル・集落レベルの普及過程を検討した。栃木県においては、現地での試験栽培が始められてから7年、本格的な生産が始められてから5年でその普及率はほぼ100%に達した。この急速な普及の一因は、女峰自体の優れた品種特性や、早期出荷による収益性の向上が期待されたことにある。しかしながら、栃木県は県内各地に現地技術実証展示圃を設置し（集落内の篤農家の存在）、農業改良普及所と農業協同組合は協力して女峰の栽培講習会を開催しており、県や農協が積極的に関与したことも女峰の大きな普及促進要因となった。集落レベルにおける女峰の採用時期により初期採用者、中期採用者、後期採用者の3つの採用者カテゴリーに分類すると、初期～中期採用者は、大規模で専門的なイチゴ生産者で篤農家の試験栽培の結果をみて採用している傾向があり、後期採用者は、農協や普及所の奨励や指導に加えて、他の生産者の動向に追隨して女峰を採用しており、小規模な生産者であり、兼業農家である傾向があった。

とよのかも、福岡県においては、広川町で試験栽培が行われてから8年、本格的な生産が始められてから5年で普及率は100%に達した。この急速な普及の要因のひとつは、福岡県園芸連によるとよのかへの品種更新の誘導があった。地域的にみると、とよのかは筑後地域に早く普及し、福岡地域への普及はそれよりも遅れた。この普及期の違いは、筑紫地域が従来はるのかを栽培し、東京市場を指向していたのに対し、福岡地域は宝交早生を栽

培し地元市場に出荷していたということに起因すると考えられる。また、広川町を事例とした集落レベルの分析によると、とよのかの普及の契機は、篤農家が自ら試験栽培を行い、懇意な生産者にも試験栽培を勧めたことにあった。Point score analysisによると農協苺部会の方針が最も重要であったことがわかった。

栃木県における女峰と福岡県におけるとよのかの普及過程には篤農家の存在や普及速度が早いなど共通点の多いことが指摘された。それは、大都市の卸売市場をめぐる産地間競争を背景として、園芸農産物の主産地が、近郊産地、遠隔産地ともに経済連や農協の組織的対応が要求されていることに起因するものと考えられる。ここに食糧作物の普及とは異なる、現代の園芸農業地域における農業イノベーションの普及の特徴が存在するとした。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、イチゴの新品種の女峰ととよのかを事例として、日本の園芸農業地域における農業イノベーションの普及過程を明らかにしたものである。戦前の水稻品種の普及は郡段階の分析で終わっており、統計の制約が詳細な実証的研究を拒んでいた。本研究は統計のもつ性格を吟味した上、新しい園芸作物の普及研究に取り組んだものである。イチゴの新品種の普及を全国、市町村、村落という3つのレベルで検討し、とくに集落レベルでイチゴの新品種の初期採用者、中期採用者、後期採用者の3つのカテゴリーに分類してその特徴を統計的かつ実証的に解明したことは、従来の農業地理学に新たな知見を加えたものである。

よって、著者は博士（理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。